



15:50~16:15 センタービル

センタービルの足元、B1Fにある広場。水際のベンチにはセンタービルで働く人達が休憩しながら食事を取っていた。吹き抜けた上部を見上げると53Fのセンタービルと一面の空が広がっている。揺られる水面の効果か、地上を歩いている時に比べて風を感じた。水面を撫でる風はより一層ひんやり感じた。水に触ってみたが、冷たかった。



17:10~17:15 野村ビル

高層のビルとビルの間にある空地に設けられた、音も無く、風に揺られる浅い水。雑踏の音はビルにブロックされ、あまり聞こえなかった。人通りも少ない時間帯で不思議な空間だった。



17:45~18:15 新宿ニアガラの滝

新宿中央公園の中でも一際広い広場に設置されたニアガラの滝。公園内に足を踏み入れるとすぐに水の音がして、近づけば近づく程その音の大きさに圧倒される。滝の目の前まで行くと滝の音以外は聞こえなくなり、水しぶきを顔面で存分に浴びた。滝の前にある広場では、滝の音、木々が揺れる音以外の外部の音は遮断され、都会に居る事を一瞬にして忘れてしまえた。都会の音がとても遠く感じた。道路際であったため、ビルや車は見えるが、まるで別空間のように感じる不思議な空間であった。



WATER FRONT プロジェクトとは。

世界の大都市の発展を見ても、河川や海などの水の存在が必ずと言っていい程関連していた。水は人々の暮らしの中心となり、実用性だけに限らず人々の心にとって大切な存在であった。江戸を例に見ると、河川舟運で町を繁栄させ、景観としても人々に癒しを与えた。時には神秘的なものとして結界・境界の役割をも果たしていた。

だがしかし、現代の都市において「水」はどんな役割を果たしているのか。インフラが整備されたおかげで蛇口を捻れば内陸部だろうと、水源が近くにならうと、いつでも綺麗な水が手に入る。生活に困る事もないだろう。だがしかし、内陸部まで水が供給される事と裏腹に、地下の配管を通る水で事が足り、昔のように表面に見えていた河川などの水がどんどん都市部では隠れてしまっているのが現状だ。つまり**意図的に作り出さなければ人々が求める癒しの面での「水」は都市部から姿を消す事となる。**

WATER FRONT プロジェクトは現代において「水」がどのように都市と関係しているか、そしてどれだけ重要な存在なのか、便利さが故に忘れてしまった大切な事を改めて再確認するためのプロジェクトだったのではないかと思います。



15:10~15:40

世界堂にて買い物をする。



16:20~16:55 三井ビル 55HIROBA

表の中央通りからも水の音が聞こえる。三井ビルの足元の広場、55HIROBA 大通り側の壁には人口の滝があり、心地よい落水の音が広場に広がっている。広場の席には内接されたスタバの商品を持ち出している社会人が多く見られた。釣られてスタバで飲み物を買った。店内の窓際の席からは滝が見えたがその影響もあるのか混雑していた。水辺に座り、ぼーっと飲んでいるとすっかり時間を忘れてしまっていた。

17:20~17:40 アイランドタワー

地下に作られた円形の広場。溝によって輪郭を淵取られ、水が中央の広場を分断していた。上空が吹き抜けていて広く気持ちの良い空間であった。広場に居る社会人たちはゆっくりしていたが、一歩広場から足を踏み出すと急ぎ足で建物の中に戻っていった。水という境界をまたぐと同じ空間であるのに別空間のように時間の流れが違うように感じ取れた。



18:28~18:41

ストリートライブを見る。趣味です。

フィールドワークを終えて

FWを終えて、今回調査対象となった日本を代表する大都市、新宿はどのように「水」と関わっている都市なのかを考えた。また同時に「水」というものを五感で感じて思った事を自分なりに考察する。新宿にも今まで気付かなかった所に景観としての「水」を大事にしている公開空地があった。そしてそれらの場所にはやはり癒しを求める人が必ず居た。それらの空地には休憩中の社員が堅苦しいオフィスから抜け出し、都会のオアシスのような存在として癒しを求めていた。今回のFWで特に強く感じた事は「水」の境界としての役割だ。

物理的な空間の隔離はもちろんだが、それ以上に強く感じたのは音による別空間の形成だった。都心部において車の騒音などを初めとする様々な人工的な音はどこにも居ても当たり前なものだ感じていた。しかし、今回調査した空地では、形状的な外界音の遮断、水の音に寄るカバリングで都会の音というものを遮断していた。意識しないと気が付かないが、それによってそれぞれの空地は都心部でも一息つける空間となっていた。